

博士論文（要約）

論文題目 原因・理由を表す複合的な接続表現の史的研究
氏 名 馬 紹華

目次

序章	9
1. 本論文の目的	9
2. 原因・理由表現の分類	9
3. 原因・理由表現の研究史	12
3.1 上代～中古の原因・理由表現の研究史—「已然形+ば」—	13
3.1.1 松下 (1928)	14
3.1.2 阪倉 (1958)	15
3.1.3 小林 (1996)	16
3.1.4 三氏のまとめ及びほかの研究	17
3.2 中世～近代の原因・理由表現の研究史—「間」「ほどに」「によって」「ところで」「さかい」「から」「ので」—	19
3.2.1 「間」—峰岸 (1959) 鈴木 (1982) —	20
3.2.2 「ほどに」—吉田 (2000) 竹内 (2006) —	20
3.2.3 「によって」—小林 (1973) 松尾 (2000) 吉田 (2007) —	21
3.2.4 「ところで」「さかい」—小林 (1973、1977) 靄岡 (1972) —	23
3.2.5 「から」「ので」—吉井 (1977) 原口 (1971) —	24
3.2.6 原因・理由表現の変遷—研究史の概観を通して—	24
4. 本論文の問題意識・目的と研究方法	26
4.1 問題意識・目的	26
4.2 研究対象・研究方法など	27
第一部 上代～中古の複合的な原因・理由表現の研究—順接・逆接—	29
第一章 「からに」の意味用法について	31
1. はじめに	31
2. 先行研究の概観と問題意識	31
3. 上代語「からに」の順接と逆接の解釈	35
4. 上代語「からに」の用法	36
5. 中古語「からに」の用法	41
6. おわりに	43
第二章 「ゆゑ(に)」の意味用法について	45
1. はじめに	45
2. 先行研究の概観と問題意識	47
3. 上代語「ゆゑ(に)」の用法	50

3.1 「人称代名詞＋格助詞＋ゆゑ（に）」の歌	51
3.2 「降らぬ雨ゆゑ（に）」の歌	53
3.3 「逢はぬ見ゆゑ（に）」の歌	55
3.4 「凡に見し人ゆゑ（に）」の歌	57
3.5 「人妻ゆゑ（に）」の歌	58
4. 中古語「ゆゑ（に）」の用法	60
4.1 和歌における「ゆゑ（に）」	60
4.2 散文における「ゆゑ（に）」	61
5. おわりに	62
第三章 「ものゆゑ」と「ものから」の意味用法について	63
1. はじめに	63
2. 語誌	63
3. 「ものゆゑ」の通時的な考察	64
3.1 上代の「ものゆゑ」—逆接用法—	64
3.2 中古の「ものゆゑ」の意味用法	67
3.2.1 中古和歌の「ものゆゑ」—逆接用法—	67
3.2.2 中古散文の「ものゆゑ」—順接用法—	68
3.3 中世・近世の「ものゆゑ」の順接用法—消極性の減少—	71
4. 「ものから」の通時的な考察	74
4.1 上代の「ものから」—対比逆接—	74
4.2 中古の「ものから」の意味用法	76
4.2.1 中古和歌の「ものから」—対立逆接—	76
4.2.2 中古散文の「ものから」—対立関係、並立関係—	77
4.3 中世の「ものから」—逆接関係—	80
4.4 近世の「ものから」—順接関係—	81
5. おわりに	83
第二部 中世～近世の複合的な原因・理由表現の研究—事態の望ましき—	87
第一章 「せいで」の原因・理由用法の成立について	89
1. はじめに	89
2. 「所為」の源流	89
2.1 古代中国語における「所為」	89
2.2 上代日本語における「所為」	90
3. 平安時代における「所為」の使用状況	92
3.1 訓点資料における「所為」	92

3.2 古記録・古文書における「所為」	93
4. 院政・鎌倉期～室町時代における「所為」の使用状況	98
4.1 古記録・古文書における「所為」	98
4.2 仏教書・説話集・軍記物語における「所為」	100
5. 近世以後の「所為」の使用状況	104
5.1 「所為」の音韻変化—「しよい」から「せい」へ—	104
5.2 「せい」の原因・理由用法の成立	106
6. おわりに	111
第二章 「ばかりに」の原因・理由用法の成立について	114
1. はじめに	114
2. 現代語「ばかりに」の意味用法の確認	114
3. 中古・中世の「ばかり」の意味用法	117
3.1 中古語「ばかり」の限定用法—「事物の限定」—	117
3.2 中世語「ばかり」の限定用法—「事態の限定」—	119
4. 「ばかりに」の原因・理由用法の成立	120
4.1 「ばかりに」の前件の捉え方の変化—「目的」から「原因・理由」へ—	120
4.2 「ばかりに」の原因・理由用法の特徴—マイナス性の発生—	123
5. 近代の「ばかりに」の意味用法	127
6. おわりに	128
第三章 「おかげで」の原因・理由用法の成立について	130
1. はじめに	130
2. 上代～中古の「かげ」の意味用法	131
3. 中世の「かげ」の意味用法	133
4. 近世の「おかげ」と「おかげさま」	137
4.1 「恩恵」の意味特徴の拡張	138
4.2 “挨拶的”な「おかげ」と“皮肉的”な「おかげ」	140
4.3 「おかげさま」	142
5. おわりに	146
第三部 近世～近現代の複合的な原因・理由表現の研究—判断の根拠—	147
第一章 「うへは」の意味用法について	149
1. はじめに	149
2. 現代語「うへは」の意味特徴の再確認	150
3. 中古～中世の形式名詞「うへ（上）」の様相—累加用法の拡張—	151

4. 中世語「うへは」の意味用法の成立と変化	154
4.1 中世前期の「うへは」の意味用法の成立	154
4.2 中世後期の「うへは」構文の変化	157
5. 近世における「うへは」の意味用法	161
6. おわりに	164
第二章 「からは」の意味用法について	166
1. はじめに	166
2. 先行研究の概観	166
3. 近世語「からは」の意味用法	168
3.1 「からは」の成立年代	168
3.2 近世期「からは」の意味用法—根拠用法の二分類—	169
4. 近世期の接続助詞「から」の意味用法	172
5. 近世期「からは」の意味特徴—現代語「からには」と比較しながら—	177
6. 近代の「からには」「以上（は）」の出現	180
7. おわりに	184
第三章 「からには」と「以上（は）」の意味用法について	186
1. はじめに	186
2. 先行研究の概観	186
3. 「からには」と「以上（は）」の構文特徴の再確認	191
3.1 「からには」構文の「確定的事態」	191
3.2 「以上（は）」構文の「対照的含意」	193
4. 肯定形「～以上（は）」と「～からには」との対応	194
4.1 「～以上（は）」が「～からには」に置き換えられる場合	195
4.2 「～以上（は）」が「～からには」に置き換えられない場合	196
4.3 「～からには」が「～以上（は）」に置き換えられない場合	197
5. 否定形「～ない以上（は）」構文と「～ないからには」構文との対応	199
5.1 「～ない以上（は）」が「～ないからには」に置き換えられる場合	200
5.2 「～ない以上（は）」が「～ないからには」に置き換えられない場合	201
6. おわりに	203
終章	205
1. 原因・理由表現の主要形式と複合的な周辺形式との関連性	205
1.1 上代～中古の「已然形+ば」と「からに」「ゆゑ（に）」の様相—	206
1.2 中世～近世の「已然形+ば」「ほどに」「によって」と「せいで」「ばかりに」「おか	

「げで」の様相—	211
1.3 近世～近現代の「から」と「からには」「以上（は）」の様相—	216
1.4 原因・理由表現の様相の通時的な変化	219
2. 原因・理由表現が表す因果関係の捉え方の変化	221
調査資料	226
参考文献	231
本論文と既発表論文との関係	238

本 文

五年以内に出版予定である

参考文献一覧

- 浅川哲也・竹部歩美（2014）『歴史的变化から理解する現代日本語文法』おうふう
- 阿部八郎（1985）「ものから・ものゆゑ」『研究資料日本文法助辞編（三）助詞・助動詞辞典』明治書院
- 生野浄子（1960）「『ため』『ゆゑ』の意味変化に就いて」『国語国文学会誌』5
- 石垣謙二（1955）「助詞『から』の通時的考察」『助詞の歴史的研究』岩波書店
- 石塚晴通（1996）「日本書紀古訓について（其の一、其の二）」『国文学年鑑』至文堂
- 井島正博（1996）「期待の表現機構」『成蹊国文』29
- 井島正博（2011）「上代・中古語推量助動詞の確定条件用法」坂詰力治編『言語変化の分析と理論』おうふう
- 市川保子（2007）『中級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク
- 糸井通浩（2001）「ものゆゑ・ものから」『日本語文法大辞典』明治書院
- 井上富蔵（1959）「『わがゆゑに』と『わがからに』の考察—万葉集語法の研究—」『岡山大学法文学部学術紀要』11
- 今尾ゆき子（1991）「カラ、ノデ、タメ—その選択条件をめぐって—」『日本語学』10-12
- 岩崎 卓（1995）「ノデとカラ」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（下）複文・連文編』くろしお出版
- 遠藤織枝（1984）「～からは／～からには」『日本語学』3-10
- 大野 晋（1953）「『カラ』と『カラニ』の古い意味について」『金田一博士古稀記念言語・民俗論集』三省堂
- 上林洋二（1994）「条件表現各論—カラ/ノデー—」『日本語学』13-9
- 小川志乃（2004）「カラニの一用法—接続助詞カラ成立の可能性をめぐって—」『語文』82
- 小田 勝（2006）『古代語構文の研究』おうふう
- 金田 弘（1976）「接続辞『サカイ』考」『洞門抄物と国語研究』桜楓社
- 亀井 孝（1935）「理由を表はす接続助詞『さかいに』」『方言』6-9
- 川端善明（1958）「接続と修飾—「連用」についての序説—」『国語国文』27-5
- 菊澤季生（1938）「古代に於ける『ため・ゆゑ・から』」『文學』6-5
- 菊地康人（1983）「バカリ・ダケ」国広哲弥編『意味分析』東京大学文学部言語学研究室
- 木下正俊（1966）「条件法の構造」『国語国文』35-5
- 木下正俊（1972）『萬葉集語法の研究』塙書房
- グループ・ジャマシイ（1998）『日本語文型辞典』くろしお出版
- 久保るみ（1997）「『以上』と『からには』について」『日本語・日本文化研究』7
- 倉持益子（2011）「労い言葉『ご苦労』の変遷とその変化の要因」『言語と交流』14
- 倉持益子（2013）「あいさつ言葉の変化」『明海日本語』18
- 啓扉浩二郎（1993）「古代接続助詞における逆接の構造—もの系の語を中心に—」『奈良教

- 育大学国文教育と研究』16
- 言語学研究会（1985）「条件づけを表現するつきそい・あわせ文（2）—その2・原因的なつきそい・あわせ文—」『教育国語』82
- 国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞』秀英出版
- 小杉商一（1994）「『ものゆゑ』逆接のこと」『東京外国語大学論集』48
- 小谷信幸（1973）「『ものゆゑ』と『ものから』という語について」『今泉博士古稀記念国語学論叢』桜楓社
- 此島正年（1966）『国語助詞の研究—助詞史の素描—』桜楓社
- 此島正年（1981）「接続助詞『もの—』の語群」『湘南文学』15
- 此島正年（1983）『助動詞・助詞概説』桜楓社
- 小林賢次（1992）「原因・理由を表す接続助詞—分布と史的変遷—」『日本語学』11
- 小林賢次（1996）『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房
- 小林千草（1973）「中世口語における原因・理由を表わす条件句」『国語学』94（『中世のこ
とばと資料』武蔵野書院1994所収）
- 小林千草（1977）「近世上方語におけるサカイとその周辺」『近代語研究』5
- 小林芳規（1969）「ばかり・のみ〈古典語〉」松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』学
燈社
- 小松寿雄（1985）『江戸時代の国語 江戸語』東京堂出版
- 小柳智一（1997）「中古のバカリについて—限定・程度・概数量—」『国語と国文学』74-7
- 小柳智一（2003）「限定のとりたての歴史的变化—中古以前—」沼田善子・野田尚史編『日
本語のとりたて—現代語と歴史的变化・地理的変異』くろしお出版
- 斎藤倫明（2008）「語構成と品詞—『以上』を対象として—」『東北大学文学研究科研究年
報』58
- 斎藤倫明（2009）「『以上』の語史—語構成史の一環として—」金水敏ほか編『シリーズ日
本語史2 語彙史』岩波書店
- 蔡 薫婕（2013）「『だけに』と『ばかりに』にみられる「限定」と「原因理由」の関わり」
『言語科学論集』17
- 境希里子（2014）「『おかげで』と『せい』について—用例分析を中心に—」『文化学園大学
紀要人文・社会科学研究』22
- 阪倉篤義（1958）「条件表現の変遷」『国語学』33（『文章と表現』角川書店1975所収）
- 阪倉篤義（1993）『日本語表現の流れ』岩波書店
- 坂詰力治（2007）「形式名詞から接続助詞の用法へ—『～うへ（は）』を中心に—」『文学論
藻』60
- 坂原 茂（1985）『日常言語の推論』東京大学出版会
- Eve E.Sweetser 著・澤田治美訳（2000）『認知意味論の展開—語源学から語用論まで—』
研究社出版

- 塩入すみ（1992）「『Xハ』型従属節について」『阪大日本語研究』4
- 塩入すみ（1995）「カラとカラニハ—理由を表す従属節の主題化形式と非主題化形式—」
『日本語類義表現の文法（下）』くろしお出版
- 島田裕子（1992）「大伴家持の天宝二年春正月の歌—宴と孤心—」『日本文学研究』28
- 志村健雄（1931）「萬葉集『ゆゑに』の解」『国学院雑誌』37
- 白川博之（1995）「理由を表さない『から』」仁田義雄編『複文の研究（上）』くろしお出版
- 鈴木 恵（1982）「原因・理由を表わす『間』の成立」『国語学』128
- 高山善行（2002）『日本語モダリティの史的研究』ひつじ書房
- 田口庸一（1959）「ものから・ものゆゑ・ものの・ものをの研究」『国文学解釈と教材の研究』学燈社 4-9
- 田窪行則（1987）「統語構造と文脈情報」『日本語学』6-5
- 竹内史郎（2006）「ホドニの意味拡張をめぐって—時間関係から因果関係へ—」『日本語文法』6-1
- 竹部歩美（2008）「逆接のモノユエについて」『人文学報』398
- 橘 純一（1928）「『ゆゑ』の古用について」『国語と国文学』5-11
- 橘 純一（1929）「『ものゆゑ』といふ語の意義について（一）（二）」『国語と国文学』6-11、6-12
- 田中章夫（1965）「近代語成立過程にみられるいわゆる分析的傾向について」『近代語研究』1
- 田中章夫（1993）「因果関係を示す接続の『デ』『ノデ』の位相」『近代語研究』9
- 田中 寛（1999）「接続助詞化した形式名詞『ウエ』の意味と機能」『語学教育研究論叢』16
- 田中 寛（2004）「形式名詞『ウエ』の意味と機能—累加的な接続成分について—」『日本語複文表現の研究—接続と叙述の構造』白帝社
- 千葉一子（1997）「万葉和歌の『からに』について」『国語と国文学』74-10
- 塚原鉄雄（1969）「ば—接続助詞〈古典語・現代語〉」松村明編『古典語・現代語 助詞助動詞詳説』学燈社
- 築島 裕（1969）『平安時代語新論』東京大学出版会
- 靄岡昭夫（1972）「『ところが』と『ところで』の通時的考察—その逆接仮定条件用法の成立時期をめぐって—」『国語学』88
- 土橋 寛（1976）『古代歌謡全注釈日本書紀篇』角川書店
- 寺村秀夫（1981）『日本語教育指導参考書 5 日本語の文法（下）』大蔵省印刷局
- 寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味 第Ⅲ巻』くろしお出版
- 中里理子（1995）「『だけに』『ばかりに』の接続助詞的用法について」『言語文化と日本語教育』9
- 中里理子（1997）「順接条件を表す『には』『からには』『以上』」『埼玉短期大学研究紀要』

- 永野 賢 (1952) 「『から』と『ので』とはどう違うか」『国語と国文学』29-2
- 西島恵美子 (1987) 「人妻ゆゑにわれ恋ひめやも」『成城国文学』3
- 仁科 明 (2006) 「『恒常』と『一般』—日本語条件表現における—」『国際関係・比較文化研究』4-2
- 仁田義雄 (1995) 「シテ節の『ハ』による取り立て」『阪大日本語研究』7
- 仁田義雄 (2000) 「認識のモダリティ」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩編『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店
- 日本語記述文法研究会 (2008) 『現代日本語文法6 複文』くろしお出版
- 丹羽哲也 (1992) 「副助詞における程度と取り立て」『人文研究』44
- 野田春美 (1997) 『「の(だ)」の機能』くろしお出版
- 原口 裕 (1971) 「『ノデ』の定着」『静岡女子大学研究紀要』4
- 馬場俊臣 (2005) 「接続助詞的用法の複合辞『うえで、うえは、うえに、うえ』—統語的特徴の整理と各用法の関係を中心として—」『北海道教育大学紀要』55-2
- 姫野伴子 (1995) 「『から』と文の階層性1—演述型の場合—」『阪田雪子先生古希記念論文集』三省堂
- 藤井涼子 (2005) 「『P以上(ハ)Q』文の意味用法—話し手の論理に基づく必然性を述べる文—」『同志社大学留学生別科紀要』5
- 船木礼子 (2007) 「原因・理由表現形式の通時的分布概観」方言文法研究会編『全国方言文法辞典原因・理由表現編』
- 古川大悟 (2017) 「カラニ考—上代を中心に—」『万葉語文研究』12
- 前田直子 (1997) 「原因・理由を表す『ばかりに』と『からこそ』」『東京大学留学生センター紀要』7
- 前田直子 (2009) 『日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述的研究—』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
- 松尾弘徳 (2000) 「天理図書館蔵『狂言六義』の原因・理由を表す条件句 ホドニとニヨッテを中心に」『語文研究』89
- 松尾弘徳 (2008) 「因由形式間の包含関係から見た天理図書館蔵『狂言六義』」『文献探究』46
- 松尾捨治郎 (1936) 『国語法論攷』文学社
- 松下大三郎 (1928) 『改撰標準日本文法』中文館 (勉誠社復刊1974)
- 松下大三郎 (1930) 『標準日本口語法』中文館 (勉誠社復刊1977)
- 松村 明 (1954) 「東京語の成立と発展—現代の国語—」『解釈と鑑賞』19-10
- 松村 明 (1957) 『江戸語東京語の研究』東京堂
- 松村 明 (1998) 『増補江戸語東京語の研究』東京堂出版
- 丸山諒男 (1966) 「接続助詞的な『間(あひだ)』について」『大東文化大学紀要文学部』3

- 三浦佑子（2007）「複文における複合接続助詞の機能—『せいで』・『おかげで』について—」『言語科学論集』 11
- 三浦佑子（2009）「評価を表す接続助詞—『だけあって』と『ばかりに』—」『言語科学論集』 13
- 三上 章（1953）『現代語法序説』 刀江書院（くろしお出版復刊 1972）
- 南不二男（1974）『現代日本語の構造』 大修館書店
- 南不二男（1993）『現代日本語文法の輪郭』 大修館書店
- 峰岸 明（1959）「今昔物語集に於ける変体漢文の影響について—『間』の用法をめぐって—」『国語学』 36
- 宮地朝子（2003）「限定のとりたての歴史的変化—中世以後—」沼田善子・野田尚史編『日本語のとりたて—現代語と歴史的変化・地理的変異—』くろしお出版
- 毛 文偉（2004）「『～カラニハ』と『～イジョウ』に関する一考察」『日本学研究—紀念中日邦交正常化三十周年』上海外語教育出版社
- 望月郁子（1969）「類義語の意味領域—ホドをめぐって—」『国語学』 78
- 森岡健二（1991）『近代語の成立—文体編—』 明治書院
- 森田良行（1980）『基礎日本語 2』 角川書店
- 森田良行・松木正恵（1989）『日本語表現文型—用例中心・複合辞の意味と用法—』アルク
- 矢島正浩（2012）「条件表現史上における原因理由文の変化の意味」『国語国文学報』 70
- 山内洋一郎（1981）「接続助詞『ものから』『ものの』について」『奈良教育大学国文・研究と教育』 5
- 山口明穂（1967）「接続助詞ものから・ものゆゑ・ものの」『国文学解釈と教材の研究』 12-2
- 山口堯二（1980）『古代接続法の研究』 明治書院
- 山口康子（2004）「『ものから』考」『国語と教育』 28
- 山崎誠・藤田保幸（2001）『現代語複合辞用例集』 国立国語研究所
- 山田孝雄（1935）『漢文の訓讀によりて傳へられたる語法』 宝文館出版
- 楊 瓊（2015）「上代の『ゆゑ』の性格」『同志社日本語研究』 19
- 楊 瓊（2016）「原因理由の接続表現『ユエ（故）』について—和漢混淆文への展開—」『文化学年報』 65
- 湯澤幸吉郎（1954）『江戸言葉の研究』 明治書院
- 湯澤幸吉郎（1955）「『ばかり』の、活用語への付き方」『解釈』 1-2
- 湯澤幸吉郎（1936）『徳川時代言語の研究』 刀江書院（風間書房再版 1982）
- 吉井量人（1977）「近代東京語因果関係表現の通時的考察—「から」と「ので」を中心として—」『国語学』 110
- 吉川泰雄（1955）「接続助詞『から』と慣用語『からは』」『国語研究』 3
- 吉田茂晃（2000）「ノダの表現内容と語性について—〈ノダ〉は『説明の助動詞』か—」『山辺道』 44

- 吉田永弘（2000）「ホドニ小史—原因理由を表す用法の成立—」『国語学』 203
- 吉田永弘（2007）「中世日本語の因果性接続助詞の消長—ニヨッテの接続助詞化を中心に—」
『日本語の構造変化と文法化』 ひつじ書房
- 吉田比呂子（1997）『「カゲ」の語史的研究』 和泉書院
- 吉野政治（1990）「人妻ゆゑに一逆的に訳されるユエについて—」『萬葉』 137
- 吉野政治（1992）「散文のモノユエ（二）と和歌のモノユエ（二）」『同志社女子大学学術年報』 43-4
- 吉野政治（1993）「逆接用法モノユエ（二）成立私案」『同志社女子大学学術研究年報』 44-4
- 李 淑姫（1998）「大蔵虎明本狂言集の原因・理由を表す接続形式について その体系化のために」『筑波日本語研究』 3
- 李 淑姫（2000）「キリシタン資料における原因・理由を表す接続形式 ホドニ・ニヨッテ・トコロデを中心に」『筑波日本語研究』 5
- 李 淑姫（2001）「文の焦点から見たホドニとニヨッテ 大蔵虎明本狂言集を中心に」『筑波日本語研究』 6
- 李 妙熙（1992）「中世における副助詞「ばかり」について—意味変遷を中心として—」『文芸研究』 129

要 旨

本研究は日本語の複合的な原因・理由表現の意味形成及び意味変化を通時的な観点から考察したものである。複合的な原因・理由表現に関しては、個々の形式に関する共時的な研究はあるが、本研究では体系的に複合的な原因・理由表現の変遷を捉えることを目的とする。本研究は、序論・本論3部・結論の5つの部分から成る。

序論では、古代語から現代語にかけての原因・理由表現の研究史を概観し、その課題を指摘した。また、本研究における原因・理由表現の分類を行い、問題意識及び研究目的、方法などを述べた。

第1部「上代～中古の複合的な原因・理由表現の研究—順接・逆接—」：上代語「からに」と「ゆゑ（に）」は原因・理由表現（順接）でありながら、逆接に用いられることがある。この順接・逆接問題を着眼点に「からに」「ゆゑ（に）」「ものゆゑ」「ものから」の意味記述を行った。

① 「からに」

上代語「からに」は、「ただ一夜隔てしからにあらたまの月か経ぬると心惑ひぬ／訳：ただ一夜逢わなかった{がゆえに／のに}、一ヶ月が経つほど心が惑った」(万葉・巻四・638)のように、順接にも逆接にも解釈される。これについて、「一夜を逢わないことによって一ヶ月が経つほど心が惑わない」ことは一般的期待であり、「一夜を逢わないことによって一ヶ月が経つほど心が惑う」ことは例外的期待であると位置づけられる。この和歌における現実と一般的期待とが対立することから逆接の意が生じ、同時に、現実と例外的期待とが一致することから順接の意が生じたと説明した。

② 「ゆゑ（に）」

上代語「ゆゑ（に）」は逆接を表す場合、「はなはだも降らぬ雪ゆゑこちたくも天つみ空は雲らひにつつ」(万葉・巻十・2322)のように、「ゆゑ（に）」の上接語に打消表現を含む修飾語句が現れるという特徴がある。一般的期待は「はなはだしく雪が降れば、雲が空いっぱい広がる」ことであるが、歌の現実「雪ははなはだしく降らなかった、雲はいっぱい広がった」であるため、一般的期待の前件（＝はなはだしく雪が降れば）と現実の前件（＝雪ははなはだしく降らなかった）とが対立することから、逆接の意が生じたと説明した。

③ 「ものゆゑ」「ものから」

この2語は、成立年代や構成要素が類似することから類義表現だとされることが多い。しかし、「ものゆゑ」は上代には逆接を表していたが、中古以降次第に順接を表すようになる。「ものから」は前件と後件とが対立する内容であるから逆接と解釈されるもので、近世以降に順接を表すようになる。加えて、「ものゆゑ」「ものから」の順接用法を記述し、2語で意味特徴が異なることを指摘した。

以上、第1部では、「からに」「ゆゑ（に）」が逆接を表す論理の違いを分析した。この違いを意味特徴から考えると、「からに」は後件が蓋然性の低い事態であるのに対して、「ゆゑ（に）」は前件が一般的な因果関係の前件と相反する事態であるという結論を得た。

第2部「中世～近世の複合的な原因・理由表現の研究—事態の望ましき—」：中世～近世における、望ましくない事態の原因・理由を示す「せいで」「ばかりに」、望ましい事態の原因・理由を示す「おかげで」の成立について考察した。

① 「せいで」

漢語「所為」は元々「行為、行動」を表し、平安時代の古記録・古文書には「(事態)ハ(主体)ノ所為ナリ」の構造を取る用例が多くある。例えば、「但御誦事、女房之所為也」(中右記)において、「事態」＝「主体ノ所為」の関係が成り立つ。次に、「事態」と「主体ノ所為」の間に因果関係が読み取られる用例が見られる。さらに、「主体」の位置(波線)に意志性のない事柄(出来事)が現れると、「事態」と「主体ノ所為」の関係は完全に「結果」と「原因・理由」になる。例えば、「而仰詞無之、未練所為歟」(猪隈閑白記)は、「指示の詞が無く、これは未練(仕事に慣れていないこと)が原因であるか」のように理解される。このように、「所為」は原因・理由用法を獲得し、音韻変化を経て江戸時代に「せいだ」になる。明治以降、文末用法から文中用法が派生し、「せいで」が成立する。

② 「ばかりに」

本来、「ばかり」は前接の目的を限定する意味用法を持つ。近世では「ばかりに」の上接語に意志・願望を表す「う／よう」が現れる。これにより、「ばかりに」の前件は目的にも原因・理由にも捉えられるようになる。例えば、「穿鑿せうばかりに、今日のはる／＼来ました」(卯月の潤色)は、「詮索{するために(目的)／したいから(原因・理由)}今日は遙々来た」の両方に理解される。「う／よう+ばかりに」の勢力が拡大するにつれ、上接語に「う／よう」がなくても「ばかりに」の前件が原因・理由を表す用例が現れる(「殿を支たばかりに〔ので〕御本望も遂られず、…殿はやみ／＼御切腹」仮名手本忠臣蔵)。このように、「ばかりに」は目的を限定する用法から、目的と原因・理由の両方に捉えられる段階を経て、原因・理由用法を獲得する。

③ 「おかげで」

語源となる「かげ」は中古において、「花や木などのかげ」の意味から「庇護」の意味を派生し、「この御蔭〔貴人の庇護〕に隠れて過ぐいたまへる年月」(源氏物語)のように用いられる。これは古代では花や木の繁茂をしばしば一族の繁栄に重ね合わせたところから生じた意味変化だと考えられる。この「庇護」の意味には「恩恵」のニュアンスが含まれ、近世になると「仏のお蔭」「婿のお蔭で」のような「恩恵」を表す「おかげ」が多く見られる。さらに、「あのお蔭のお蔭で大分よい人がございますから」(浮世風呂)のように、「恩恵」の与え手の位置に事柄や出来事が現れることによって、「おかげで」は原因・理由表現として捉えられるようになった。

以上、第2部の考察から、この3語の原因・理由用法の成立は上接する語の変化によってもたらされたものであるという共通性を持つことが明らかになった。

第3部「近世～近現代の複合的な原因・理由表現の研究―判断の根拠―」：近世～近現代における、判断の根拠を表す「うへは」「からは」「からには」「以上（は）」の意味用法及び形式間の相違について考察を行った。

① 「うへは」

現代語「うへは」は判断の根拠しか表せないが、中世語「うへは」には判断の根拠と事態の原因・理由の両方の用法がある。これについて、形式名詞「うへ（上）」の累加用法から「うへは」の前件に「ある段階に達した状況で、それを踏まえて」という意味合いが生じ、これに基づいて「うへは」の後件には判断でも出来事でも現れることが可能だと述べた。時代が下ると前の出来事と後の出来事に因果関係が存しても、直接「うへは」が用いられるのではなく、間に判断を表す語句を介する用例が現れる。これにより、「うへは」は次第に判断の根拠を表すようになる。

② 「からは」

近世語「からは」が表す判断の根拠は、さらに説明の根拠と行動の根拠に分けられる。前者は「からは」の後件が強い断定であることが多いのに対して、後者は「からは」の後件が意志・願望・義務であることが多い。説明の根拠を表す「からは」は中世「うへは」の意味特徴に近く、行動の根拠を表す「からは」は現代語「からには」「以上（は）」の意味特徴に近いことを述べた。すなわち、「からは」の意味特徴は「うへは」「からには」「以上（は）」の中間的なものと位置付けられることを論じた。

③ 「からには」「以上（は）」

この2語は類義語でありながら、置き換えられない場合がある。「からには」は前件が必ず確定的事態であるのに対して、「以上（は）」は確定的・仮定的事態の両方が来ることができる。一方、「以上（は）」の構文には常に対照的含意が読み取れるのに対して、「からには」の構文にはそれが読み取れる場合と読み取れない場合がある。確定的事態と対照的含意という2つの意味特徴が揃う場合においてのみ、2語が置き換えられることを明らかにした。

以上、第3部の考察を通して、「うへは」「からは」「からには」（「以上（は）」）には判断の根拠を表す形式としての共通点と、後件に示される判断における相違点があることが確認された。

終章では、本論の3部で扱った原因・理由表現とその時代の主要な原因・理由表現との関連性について考察し、古代語から現代語にかけての原因・理由表現が表す因果関係の捉え方の変化を分析した。日本語の原因・理由表現は因果関係の種類によって「事態の因果関係」を表すものと「判断の因果関係」を表すものの2種類に分けられる。本論の第1部、

第2部で扱った「からに」「ゆゑ(に)」「せいで」などは「事態の因果関係」を表すもので、第3部で扱った「からには」「以上(は)」などは「判断の因果関係」を表すものである。これらの形式を見ると、古代語の原因・理由表現は主に「事態の因果関係」を表し、「判断の因果関係」を表すものは近世以後に発達する。とりわけ、「うへは」は「事態の因果関係」から「判断の因果関係」へ移行する例であり、その変化は象徴的である。つまり、古代語から近代語にかけて、日本語の原因・理由表現が表す因果関係の捉え方は「事態の因果関係」から「判断の因果関係」へと拡張したとすることができる。